

《 1937年、トーマス転炉を設置、日本鋼管（現 JFE スチール） 》

転炉とは、高炉（溶鉱炉）でつくられた銑鉄から鋼（はがね）をつくるための炉です。その転炉を使った「トーマス転炉製鋼法」は、英人シドニー・G・トーマス氏が発明し、その後ドイツで急速に発展しました。

この製鋼法は、溶銑（銑鉄をとかすこと）中に空気を吹き込み、酸化熱により不純物である炭素や燐（りん）を除去する仕組みであり、製鋼に要する時間が短く、燃料が要りませんから、近代製鉄技術三大発明の1つとされています。

含燐鉄鉱石の乏しい日本では全く注目されませんでした。日本鋼管（現・JFE スチール）の創設者である今泉嘉一郎氏は、その有利性に着目し、燐分の少ない鉄鉱石には高炉中に燐を加えて調整するという「日本式トーマス製鋼法」を発明しました。

このトーマス転炉は、当時の日本の鉄鋼増産に大きな威力を発揮し、1938年（昭和13）から1957年（昭和32）年まで、日本鋼管の基幹設備として稼働しました。現在は川崎市市民ミュージアムに寄贈され、野外に展示されています。

写真は、展示されているトーマス転炉（細見撮影）

